障害のある生徒への就労のアセスメントの活用状況と課題 ②

：特別支援学校への調査から

〇相田　泰宏（独立行政法人国立特別支援総合研究所　主任研究員）
榎本　容子（独立行政法人国立特別支援総合研究所）
伊藤　由美（独立行政法人国立特別支援総合研究所）
小澤　至賢（独立行政法人国立特別支援総合研究所）

背景 と 目的

■文部科学省(2021)は、発達障害等の障害のある生徒について、高等学校卒業後の**進路先で困難さを抱える**場合があることについて触れ、**学校段階からの卒業後を見据えた指導・支援**や、**進路先への情報の適切な引継ぎ**を行うことの重要性を指摘している。

■卒業後を見据えた指導・支援に当たり重要となるのが、**就労のアセスメント**である。しかし、高等学校でのノウハウの蓄積は乏しく 、今後、**福祉・労働機関**や、センター的機能を持つ**特別支援学校との連携の充実**が期待される。

■連携の充実に向けては、**障害のある生徒への就労のアセスメントの活用に係るノウハウの蓄積**が重要になるが、これまでこのような実態について把握した調査は見当たらない。

■以上から、本研究では、高等学校への相談支援を行うことが想定される、**「特別支援学校」**を対象とし、**高等学校等との連携状況**と、**自校の障害のある生徒の進路指導に当たり活用している就労のアセスメントツール**を把握した。

方　法

＊所属機関の倫理審査を受け実施。書面での研究説明の上、回答は自由意志に委ねた。

■全国の特別支援学校高等部1,014校（高等特別支援学校を含む）とした（悉皆）。回答は、各校の進路指導担当や特別支援教育コーディネーター等のうち、本調査の内容について最も実態を把握している者1名に依頼した。

■2022年1月に郵送し、2022年3月までに郵送又はメールにより回収した。

■回答機関の属性や以下の項目等を尋ねた。

（1）高等学校から相談や支援の依頼を受けた障害種

令和元年度から令和3年12月現在までに、「高等学校から相談や支援の依頼を受けたかどうか」と、依頼を受けた場合はその「障害種」を選択形式にて尋ねた。

（2）障害のある生徒への就労のアセスメントツールの利用状況と、利用している就労のアセスメントツール

自校の障害のある生徒への就労のアセスメントツールの利用状況を選択形式にて尋ねた。選択肢にないツールは、自由記述で回答を得た。（ツールは発表①と同じものを提示）

（3）障害のある生徒へのキャリア・パスポートの作成・活用状況

キャリア・パスポートの記録も、生徒の就労に向けた考えや状況を知る資料となりうる。そこで、自校の生徒に対するキャリア・パスポートの作成・活用状況を選択形式にて尋ねた。

結 果

＊回収数は551件であった。
分析ごとに有効回答数は異なる。

(1)－① 高等学校から相談や支援の依頼を受けた障害種

■高等学校から「依頼を受けた」が60.2%、「依頼を受けていない」が39.8%であった(図1)。

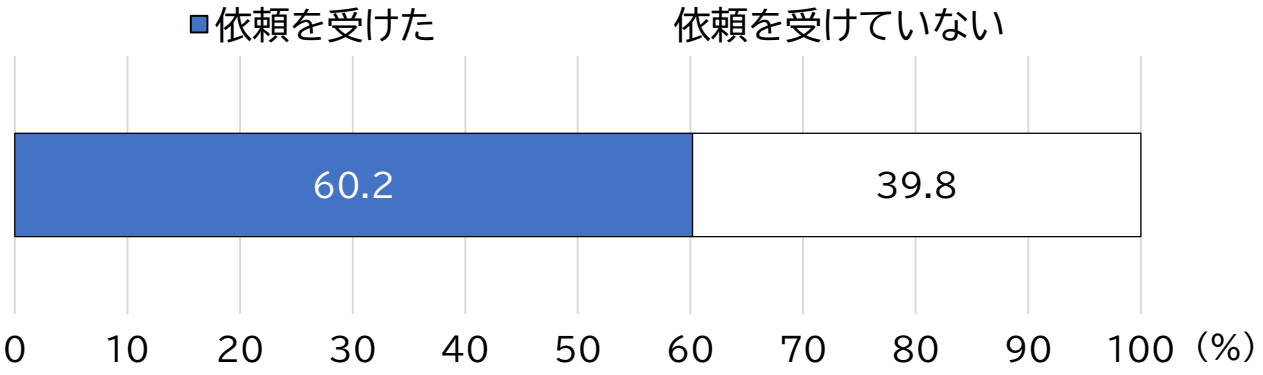

図1 高等学校からの相談や支援の依頼の有無(n＝545)

結 果

(1)－② 高等学校から相談や支援の依頼を受けた障害種

■依頼を受けた障害種として、最も多かったのは「発達障害」であり72.3%、次いで「知的障害」が49.5%、「精神障害」が25.9%と続いていた。相談や支援への対応が困難であった障害種はいずれも10%以下であり、少なかった(図2)。

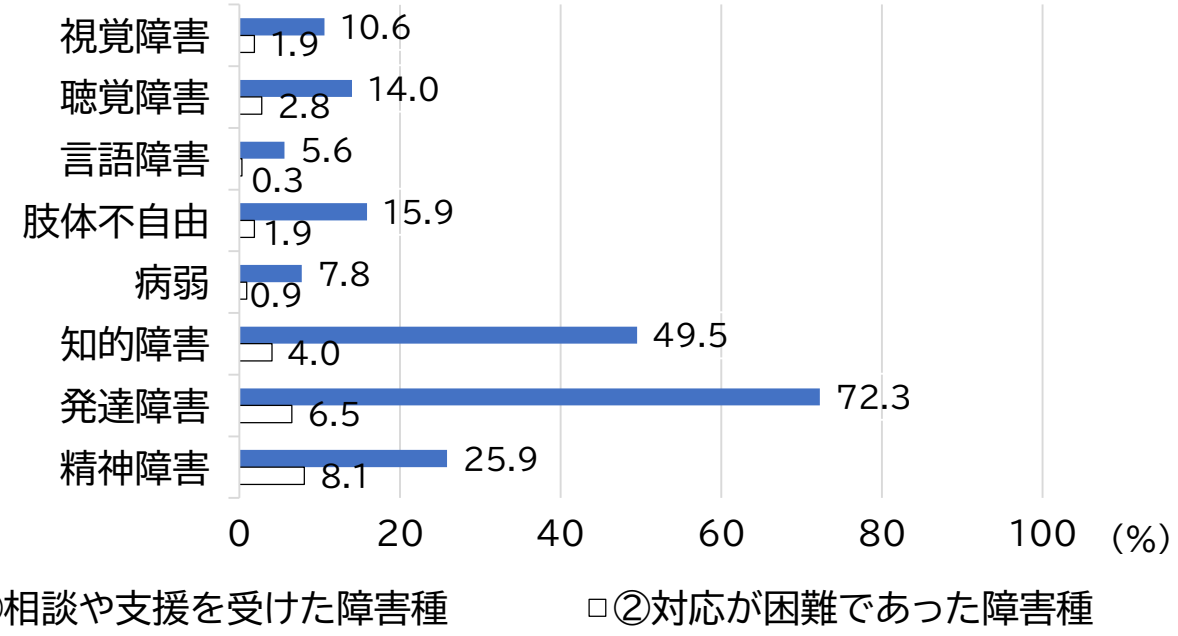

図2 高等学校からの相談や支援の依頼・対応状況(n＝321)

結 果

(2)－① 障害のある生徒への就労のアセスメントツールの利用状況

■就労のアセスメントツールの活用は、74.5%であった(他機関が実施するツールの活用を含む)。

自校での利用は53.2%であった(図3)。

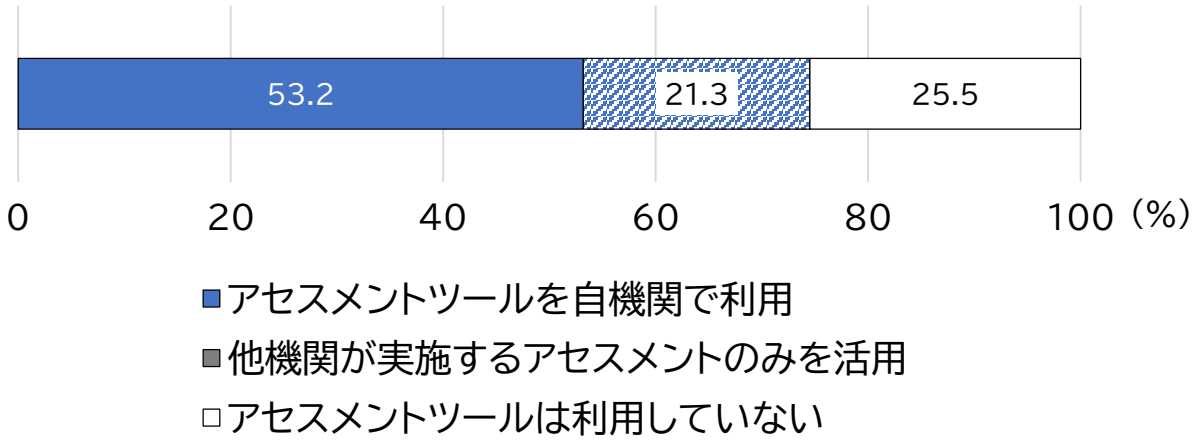

図3 就労のアセスメントツールの利用状況(n＝530)

結 果

(2)－② 障害のある生徒に利用している就労のアセスメントツール

■選択肢に挙げていた既存のツールの利用状況は低く、その他のツールが利用されていた(図4)。

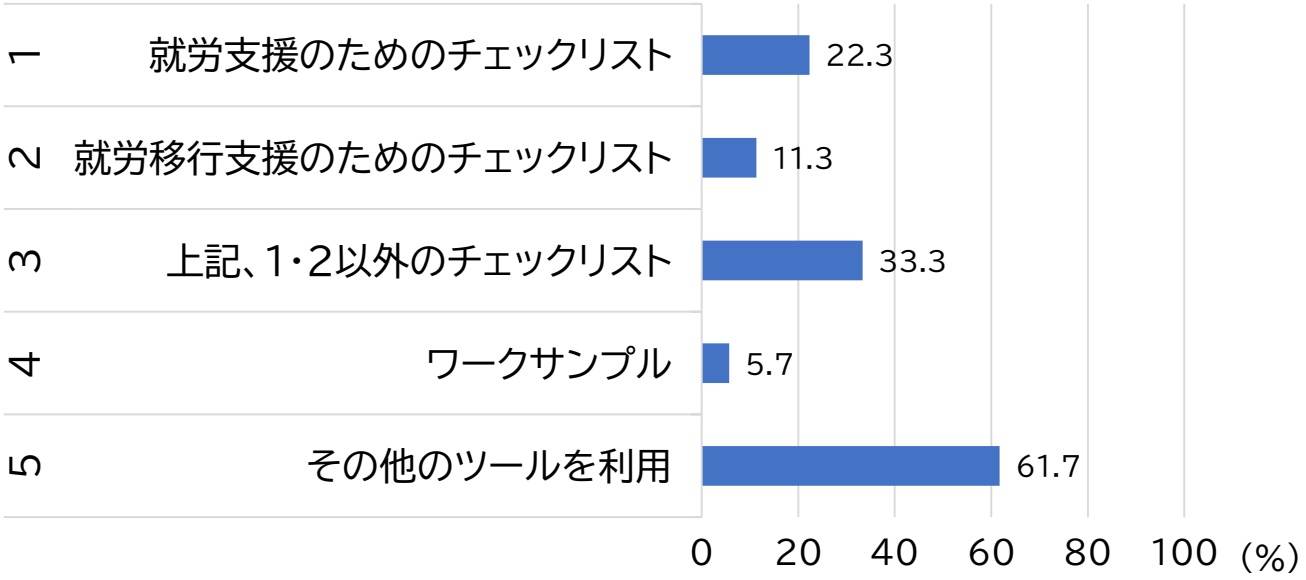

図4 障害のある生徒に利用している就労のアセスメントツール
(n＝530)

結 果

（2）－③　障害のある生徒に利用している就労のアセスメントツール（その他）

■自由記述回答を見ると、自校で作成したリストが多く挙げられていたが、いくつか既存の検査等も挙げられていた（表1）。

表1　就労のアセスメントツールに関する自由記述回答例

【項目3　上記1・2以外のチェックリスト】 その他のチェックリスト名	【項目5　その他のツールを利用】 その他のツール名
自校で作成したリスト、地域で作成したリスト、CLISP-dd、就労パスポート　等	自校で作成したリスト・実習評価表、GATB、VRT、VinelandⅡ、WAIS、TTAP、BWAP2、ESPIDD　等

結 果

（3） 障害のある生徒へのキャリア・パスポートの作成・活用状況

■最も多かったのは「キャリア・パスポートの作成は進んでいない」であり、45.4%であった。

進路指導に活かしている事例がある」は28.0%であった（図5）。

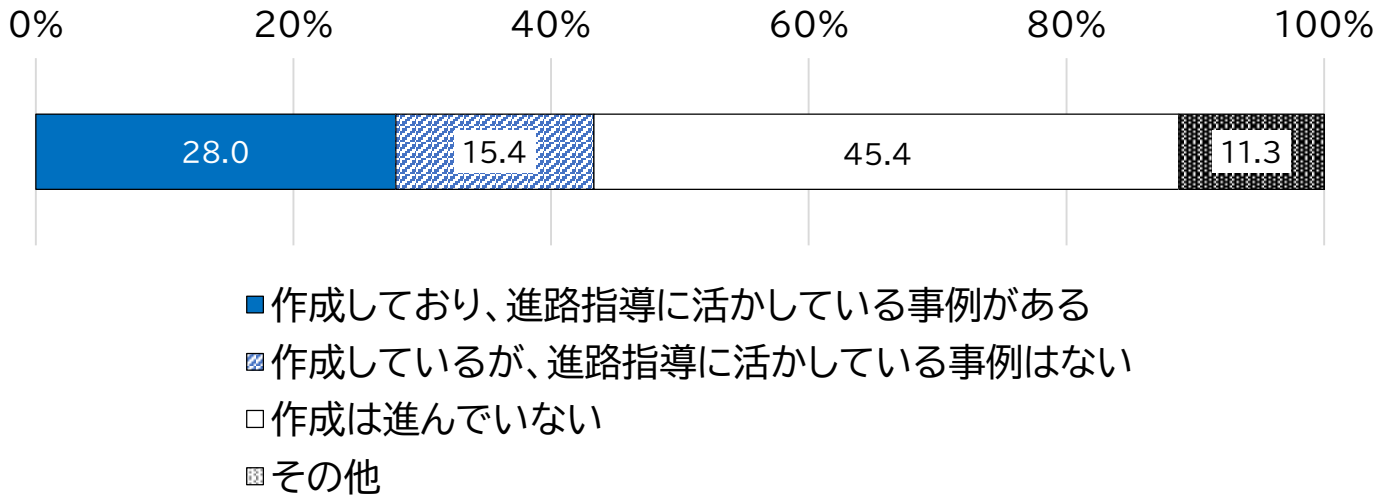

図5 進路指導におけるキャリア・パスポートの活用状況
（n＝530）

考 察

■7割強の特別支援学校が就労のアセスメントを活用していることからも、就労のアセスメントが障害のある生徒への進路指導において一定の役割を果たしていることがうかがえる。
就労のアセスメントを行うことで、より客観的に生徒の特性や適性を把握でき、生徒の能力が十分に発揮できる職業・職場選択へと寄与することを期待し活用されていると思われる。

■しかし実際に活用しているツールについては様々で、学校の実情に応じてツールを選択・活用している可能性がある。
活用するに当たり、ツールの特徴を把握すること、学校の進路指導の方針や生徒の実態を考慮すること、活用する目的を明確にすること等が欠かせない。

考 察

■一方キャリア・パスポートについては、導入されて間もないとはいえ、特別支援学校では進路指導に活かしきれていない。
特別支援学校では個別の教育支援計画や個別の指導計画をキャリア・パスポートの活用に代えることが可能であり(児童生徒自らが活動を記録することが困難な場合など)、そのために作成していない学校が約半数もあるのではないかと推察する。

■しかしキャリア・パスポートの目的を踏まえて活用すれば、進路指導に有効な教材であることは明らかであり、障害のある生徒に対しても同様である。

■今後、高等学校に在籍する生徒の就労のアセスメントの実施に当たり、特別支援学校との連携のもと、どのようなツールをどのように活用していけばよいか検討していく必要がある。

今後、各機関・学校がそれぞれ独自のツールを使う形となると、アセスメント結果(視点、評価基準)に齟齬が生じ可能性はないのだろうか…？
既存のツールを土台として、よりよい形を模索することはできないのだろうか…？

参考文献等

・文部科学省『新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告』,（2021）.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/154/mext_00644.html
（2023年4月1日閲覧）

＜キャリア・パスポートとは＞

・「児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオ」のことをさす。

文献：文部科学省『「キャリア・パスポート」の様式例と指導上の留意事項』,（2019）.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/154/mext_00644.html（2023年4月1日閲覧）

・現行の学習指導要領では、キャリア教育の充実に向けて、「一人一人のキャリア形成と自己実現」に関する指導に当たり、「学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、**児童（生徒）が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること**」と示されている。
この教材が「キャリア・パスポート」に相当する。2020年4月から全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校で作成し、活用されることとなっている。